

付

録

# 仏教通史

## — インドから日本への流れ —

### 一、インド

それは人類の精神史の上における最大のエポック・メイキングな世紀の一つであった。アジアの光はそのときあかあかと中インドに点ぜられたからであり、あるいは、別の言い方をするならば、そのときそこに滾々として湧きいでた智慧と慈悲の泉は、やがて多くの世紀にわたってアジアの人びとの心を潤すものとなって今日に及んでいるからである。

ゴータマ・ブツダ、後の仏教者たちによって「シャーキヤムニ」(釈迦牟尼)すなわち「シャーキヤ(釈迦)族よりいでし聖者」とたたえられるその人が、家郷を立ちいでて出家し、南の方マガダに至って、ついにかの菩提樹のもとにおいて正覚を成就したのは、およそ西暦前第五世紀のなかばごろと推定される。それより、「大いなる死」(大般涅槃)に至るまでの四十五年、彼は智慧と慈悲の教えをひっさげて、たゆみない伝道説法の生涯を続けた。その結果、同じ世紀の終わりごろまでには、大いなる法城が、中インドの国々及び諸部族の間に不動に築かれていった。

マウリヤ王朝の第三世アショーカ(阿育、在位西暦前二六八—二三二)王の時代に至って、ゴータマ・ブツダの教えは、インドの全域にゆきわたり、さらに、その領域を越えて、遠く国外にまで伝播される機会を持つことを得た。

マウリヤ王朝は、インドにおける最初の統一王朝であった。その第一世チャンドラグプタ王（在位西暦前三一七―二九三ごろ）のころ、その領域はすでに、北はヒマラーヤ山系、東はベンガル湾、西はヒンドウークシユ山脈、そして南はヴィンディヤ山脈の南に及んでいたが、アシヨールカ王はさらに、その南方カリンガ等を討つて、その領域をデカン高原にまで拡大した。

この王はもともと性格が狂暴で、人びとは彼を呼んでチャンダーシヨールカ（恐るべき阿育）と称したと伝えられるが、カリンガの征服にあたって、そこに展開された惨状を見てから性格が一変し、それが動機となつて、智慧と慈悲の教えの熱心な信奉者となつた。それ以来、この王が仏教者としてなした多くの事業の中で、次の二つのことがもつとも注目される。

その一つは、いわゆる「アシヨールカの刻文」、すなわち、仏教による施政方針を石柱もしくは磨崖に刻んだものを領内の各地に建立させたことである。第二は全インドにブッダの教法を弘布するとともに、さらに、王はその領域を越えて、使節を四方の国々に遣わし、智慧と慈悲の教えの旨を伝えさせた。なかでも、特に注目されることは、それらの使節のあるものは、遠くシリア、エジプト、キレネ、マケドニア、エピルスにまで派遣されたことであつて、そのとき仏教は広く西方の世界に伝えられた。また、そのとき、スリランカに遣わされた使節マヘーンドラは「うるわしきランカードヴィーバ（スリランカ島）にうるわしき教えを樹立する。」ことに成功して、いわゆる南方仏教の基点をかの島にうち立てた。

## 二、大乘の興起

後代の仏教者はしばしば「仏教東漸」という表現を用いる。ところが、紀元前の諸世紀においては、仏教の顔は明らかに西に向けられていた。その顔が、やがて東に向けられ始めたのは、およそ紀元前後のころのことであつ

た。だが、そのことに語り及ぶまえに、我々はまず、仏教の中における大きな変化について語っておかなければならない。それはほかでもない、「大乘」と称する「新しき波」が、いまや仏教の中に顕著な存在として姿を現わしてきたことについてである。

その「新しき波」が、いつごろ、いかにして、何びとによつて生まれいでたか、その始動のいきさつは、だれも明確に語ることはできない。それについて我々が指摘し得ることは、わずかに、第一には、それは明らかに進歩主義の比丘たちによつて、いわゆる大衆部の思想的系譜の中に生まれたものに相違ないということであり、第二には、紀元前の一・二世紀から紀元後の第一世紀ごろにかけて、いわゆる大乘經典なるものうちの重要なもののいくつかがすでに存在していたということである。そして、それらの大乘經典を背景として、ナーガールジュナ（龍樹）のすぐれた思想的活動が展開されるに及んで、大乘仏教なるものの姿は、いまやあざやかに仏教史の舞台の前景に現われいずるに至つたのである。

長い仏教の歴史の中において、大乘仏教が果たした役割はまことに大きい。やがて説き至ろうとする中国の仏教ならびに日本のそれのごときも、ほとんどその歴史のすべてを通して、まったく大乘仏教の影響のもとにあつた。それも決して不思議なことではあるまい。なんとなれば、そこには大衆の救済という新しい理想がうち出されておき、その理想を實踐するものとして、菩薩という新しい人間像が描き出されておき、さらに、それらを支えるものとして、大乘の思想家たちが造り営んだ形而上学あるいは心理学の領域における知的成果もまたすばらしいものであつた。かくして、それは、明らかにゴータマ・ブツダの教法の系譜につらなりながらも、他方、いくたの新しきものを智慧と慈悲の教えの流れに注ぎ加えた。それによつて、仏教は、いよいよ、熱情にあふれたものとなり、エネルギーに富めるものとなり、滔々たる大河のさまをなして、東方の国々を潤すこととなるのである。

### 三、西域

中国の人びとがはじめて仏教を知ったのは、西域を通してであった。したがって、インドから中国への仏教の道を語るものは、まずシルクロードのことから語り始めなければならない。その道が、アジアの中央部の荒涼たる地域をつらぬいて、西洋と東洋とをつらねる貿易路として開かれたのは、紀元前第二世紀の末ごろ、漢の武帝（西暦前一四〇—八七）の時代であった。そのころ漢の領土は、はるか西の方にまで広げられ、それに接する西方の国々、大宛（Ferghana）だいえん 康居（Sogdiana）かうきょ 大月氏（Tukhara）だいげつし、くらに安息（Parthia）あんそくの諸国には、かつてアレクサンドロス大王によって吹きこまれた商業精神がまだ活発に生きていた。そして、それらの国々をつらねる古代貿易路においては、中国の絹がもつとも大きな役割を担う商品であった。それがシルクロードの名のいずるところであった。しかして紀元前後のころから、仏教を中心として始められたインドと中国の間の文化接触もまた、まずこの貿易路によって行われた。かくして、シルクロードはまた仏教の道であったということを得るのである。

### 四、中国

中国人の仏教受容の歴史は、まず經典の招来とその翻訳の事業を主題としてつづられねばならない。その最初のもの、古来から、後漢の明帝の永平年間（A. D. 五八—七六）迦葉摩騰らによつてもたらされ訳出された『四十二章經』であるとされているが、今日では、それは疑わしい伝説にすぎないとされている。その確証されるものは、紀元一四八年から一七一年ごろにわたり、洛陽において訳業に従事した安世高の仕事である。それ以来、北宋（九六〇—一二一九）の時代に至るまで、中国の仏教經典翻訳の事業は、およそ千年にわたつて営み続けられた。

その初期においては、經典をもたらし、かつ、その翻訳の中心的役割を演じた人びとは、たいてい西域からきた僧たちであった。例えば、いまの安世高は安息国すなわちパルティアからきた人であり、第三世紀のころ洛陽に來つて『無量壽經』を訳した康僧鎧は康居すなわちサマルカンド地方の人であつたし、あるいは、『正法華經』の訳者として知られる竺法護は月氏の出であつて、第三世紀の後半から第四世紀のはじめまで、洛陽または長安にあつた。そして、第五世紀のはじめ龜茲よりきたつた鳩摩羅什に至つて、中国の訳經は一つの頂点に達した。

そのころから、中国よりインドに至つて梵語をまなび、法を求める人びと、すなわち、入竺求法僧の活動が始まつた。その先駆者は法顯(三三九—四二〇頃)であつて、彼は隆安三年(三九九)長安を出発し、十五年を経て帰国した。そのもつとも有名なものは玄奘(六〇二—六六四)であつて、彼は貞觀元年(六二七)に出発し、貞觀十九年(六四五)に帰国した。その間じつに十九年に及んだ。さらに義淨(六三五一—七二二)は、咸亨二年(六七二)海路によつてインドに向かい、二十五年の後、同じく海路によつて帰国した。

彼らは、自らインドに至つて梵語をまなび、自ら經典を選んで持ち帰り、かつ、帰国の後には、たいてい訳經の中心的役割を演じた。ことに、玄奘がしめした語学力は、群を抜くものがあつて、彼の精力的な訳業によつて中国の經典翻譯の歴史はもう一つの頂点を迎えた。學者たちが、鳩摩羅什によつて代表される旧來の翻譯を「旧訳」と稱し、玄奘以後の新しいそれを「新訳」とよぶのは、その故をもつてである。

そのようにして訳出されたほう大な量にのぼる仏教經典をよりどころとして、彼らの営んだ思想的・宗教的営みもまた、しだいに中国化の傾向を強める。そこには、かの民族の資質や要求や自信が明らかに現われている。その初期のころ、彼らが特に般若部の經典が語る「空」の形而上学に心を傾けたのもその現われであつた。やがて彼らが、いわゆる「小乘」を捨てて、もっぱら「大乘」に心を傾けるものとなつたのもその現われであつた。さらに、その傾向は、天台宗においてようやく顯著となり、禪宗の出現に至つてきまつたといふことを得るであらう。

中国において天台宗が大成したのは、第六世紀の後半、その第三祖、天台大師こと智顛（五三八―五九七）によつてであつた。彼は、中国の生んだ仏教思想家の中の代表的な頭脳であつて、彼の頭脳が生んだ「五時八教」の教判は、その後長きにわたつて、中国ならびに日本の仏教に広い影響力をもつた。

思うに、中国においては、諸経はその成立の順序にかかわりなく招来され、招来されるにしたがつて翻訳された。いまやそのほう大な量にのぼる諸経を前にして、その成立と価値づけをいかに理解するか、その見解を示すことによつて仏教全体の理解の仕方を語り、かつ、自己の依つて立つところを示すことが必要であつた。それがいわゆる教判もしくは教相判釈の課題であつた。その意味において、教判とは、何よりもまず中国的な思想の営みであるが、その中でも、智顛の教判はもつとも整然たるものであり、したがつてまた、見事な説得力をもつていたのである。だが、近代の仏教研究の出現とともに、その支配的影響はついに終わりをつけた。

中国仏教の歴史の中において、その「最後に至れるもの」は禪宗であつた。その初祖とされるものは、外国の沙門、菩提達磨（一五二―二八）であるが、彼によつてまかれた種が、中国仏教の精華として大いなる花を開いたのは、第六祖、慧能（六三八―七一三）以後のことであつて、第八世紀以後、相ついで人材を輩出し、数世紀にわたる禪の隆盛を招来した。

彼らの所懐を問えば、「仏祖正伝」といい、また「教外別伝」と語る。しかるに、中国にあつては、「教」とは、さしあたり、経にはかならない。その故にこそ、中国人は、経の招来と翻訳に努力を傾けて、すでに幾世紀にも及ぶ。しかるに、いま彼らはそれらの功をほかにして、別伝ありとなし、ひたすらに対座して、仏祖の正伝するところとなす。その不思議な言説の機微を尋ね至つてみれば、そこには、中国人の資質に深く根を下ろした仏教の新しい考え方があつて、それを支えていることが知られる。それはもはや中国人の仏教以外の何ものでもなかつた。しかも、ゴータマ・ブツダの教えは、その新しき流れをとり加え、ますます滔々たる大河となつて、東方の国々を潤し來つたのである。

## 五、日本

日本仏教の歴史は第六世紀に始まる。紀元五三八年、欽明天皇の朝廷に、百済くだらの王が使臣をもつて仏像・経巻を献じたのが、この国に仏教の伝来した始まりである。それ以来、この国の仏教の歴史は、すでに千四百年を越える。

その長い歴史の中に、わたしどもは、三つの焦点を結んで考えてみる事ができる。

その第一の焦点は、第七・八世紀の仏教の上に結ばれる。それを物件をもつていえば、法隆寺の建立こうりゅう(六〇七)より東大寺の建立(七五二)に至る時代である。その時代を回顧するにあたって、思い忘れてならないことは、かの時代のアジア全体にわたって、異常な高まりをしめしていた文化の潮うしほのことである。西の方の文明が深い暗黒の中に閉じこめられていたそれらの世紀にあつて、東の方の文明は、目を見張るような活発にして雄大な動きを繰り広げていた。中国でも、西域でも、インドでも、南海の国々でも、知的、宗教的、そして芸術的な活動が力強く営まれていた。仏教がそれらの動きを互に結びつけて、広大なヒューマニズムの潮が東方の世界を洗っていた。そして、あの絢爛けんらんたる法隆寺や雄大なる東大寺の建立と、それらをめぐる多彩な宗教的ならびに芸術的活動など、それらの世紀の新しい日本文化の動きは、すべて、かの荒漠こうぼくたるアジア全域にわたる文化の潮の、最東端におけるいぶきであつたと知られる。

長い間、なお未開の状態にあつたこの国の民族が、いま大いなる文化の潮をあびて、ぱつと一時に文化の花を開く、それがそれらの世紀におけるこの国の人びとのめぐりあわせであつた。そして、その国際的な文化の主たる担い手が仏教にほかならなかつたのである。したがつて、その時代の寺院は国際的な明るい文化の中心であつた。僧侶は新しい知識のリーダーであつた。経典は優れた思想の乗物であつた。そこには、一つの宗教というよりも、ずっと広汎こうはんな、大いなる文化そのものがあつた。それがかの世紀における初伝の仏教の真相であつた。



やがて第九世紀に入ると、最澄（七六七―八二二）・空海（七七四―八三五）という二人の偉大なる仏教者が現われ、いわゆる平安仏教とよばれる、初めての日本仏教とでもいふべき宗派を創設するのである。ややもすると貴族たちのひまつぶしに流れがちになりつつあった仏教を、本来の修行という立場でとらえ、それまでの都会中心の仏教を、山の中に持ちこんで、そこに修行の根本道場を確立した。その後三百年余、この二人の流れである天台と真言とが、主に朝廷や貴族を中心として栄えたのである。

その第二の焦点は、第十二・三世紀の仏教の上に結ばれる。そこには、法然（一一三三―一二二二）親鸞（一一七三―一二六二）道元（一二〇〇―一二五三）日蓮（一二二二―一二八二）など、この国の生んだすぐれた仏教者たちがあつた。今日においても、わたしどもは、この国の仏教について語ろうとすれば、これらの人びとの名をほかにしては語ることを得ない。では、何のゆえをもつて、これらの世紀のみが、かくもすぐれた仏教者たちを輩出させたのであろうか。それは一つの大きいなる共通の課題が彼らの前にあつたからである。その共通の課題とは何か。それは仏教の日本的受容であつたということはいい得るであらう。

かくいえば、あるいは問う者があるであらう。仏教はすでにそのときよりはるか以前に伝来していたのではなにかと。歴史的事実はそのとおりである。だが、それをこの国の人びとが、じゅうぶんに消化し、変容して、まったく自己のものとする―そのような文化受容の仕事は、たいてい数百年の努力を必要とするのである。つまり、第七・第八世紀に始められた仏教受容の努力が、ようやく春來つて、万花一時に咲きそつ―それが第十二・三世紀における一群の仏教者たちの仕事であつた。

それ以後の日本仏教は、それらの仏教者たちによつて与えられた基盤の上に、その余榮を保つて今日に至つた。つまり、かの世紀に一群のすぐれた仏教者たちを輩出して以後は、日本仏教の歴史には、もはや輝かしい陽は輝かなかつた。だが、それ以後の日本仏教の歴史にも、もう一つ注目されるべきことがあるように思われる。それは近代の仏教学における原始仏教の研究の成果である。

この国の仏教は、その初伝このかた、中国仏教の影響のもとに、ほとんどまだいじょうったく大乘の仏教であつた。ことに第十二・三世紀のすぐれた仏教者たちの輩出以後は、宗祖たちを中心とする大乘の教えがその主流をなし今日に至る。そのようなこの国の仏教の歴史の中に、原始仏教の研究が起つてきたのは、およそ明治のなかば以後のことに属する。それによつて、宗祖のほかに教祖のあることを忘れていた人びとの前に、ゴータマ・ブツダの姿があざやかに再現され、大乘の教えのほかは顧かみなかつた人びとの前に、整然たるブツダの教法が明らかにされた。それはなお学問の領域にとどまり、新しい宗教的熱情をよび起すものとはなっていないけれども、少なくとも、この国の人びとの持つ仏教の知識は、大きく変化しつつある。わたしどもは、そつと、そこにスポットを当てて、第三の焦点とする。

## 仏教聖典流伝史

仏教とは釈尊一代四十五年間の説法をもととする宗教である。だから、釈尊のことは仏教においては絶対の權威を持つものであつて、たとえ仏教に八万四千の法門があり、多くの宗旨、宗派を数えるとはいへ、いづれも釈尊の説法を離れたものではない。そしてこの説法を書き記したものが、一切経とか大藏経などといわれる經典なのである。

釈尊は人間の平等を強く主張された。どんな人にも完全に理解できるような日常語で平易に教えを説かれたのである。そして八十歳で亡くなられるまで一日も休まず、多くの人びとのために教えを説き続けられたのである。

釈尊が亡くなられた後は、弟子たちはそれぞれ自分の耳で聞いた釈尊の教えを、人びとに伝えた。しかし、語り伝えられる間には聞き違いもあるうし、覚え違いも起こるであらう。しかも、釈尊のことは常に正確に伝えられなければならない。

すべての人が平等にその教えに接する機会が与えられなければならない。そこでここに釈尊の教えを、間違いない形で後世に伝えるために、長老たちが集まつて、教えの整理を行うことになつた。これを結集けつじゅうという。結集には大勢の長老比丘びくたちが集まり、各自の聞き伝えてきたことばや教えを誦よみえあつて、間違っていないかどうかどう

か、何か月にもわたって討議した。このことからしても、いかに敬虔けいけん、かつ慎重に、釈尊のことはを伝えようとしたかがわかる。こうして整理された教えは、やがて文字によって記録されるようになる。文字に書き下された釈尊の教えは、後に後世の高僧たちによって、注釈や解釈が加えられた。これを「論」という。仏陀の教えそのものと、後に加えられた論と、戒律の三つを「三藏さんざう」という。三藏とは経藏きょうざう、律藏りつざう、論藏ろんざう、の三つであり、藏とは「いれもの」の意味である。すなわち仏教の教えを収めてあるものという意味で、経とは仏陀の教えそのもの、律とは教団の戒律を説いたもの、論とは高僧たちによって書かれた注釈である。この三藏はほとんどすべての部派がそれぞれの伝統に従ったものを保持していたが、現在、完全な形で伝えられているのは、南方上座部のパーリ語によるもののみである。この「パーリ語三藏」は、南方に伝わった仏教諸国の共通の聖典として、重要な役割を果たしている。

中国に初めて仏教が伝わったのは、伝説によると後漢の明帝の永平十年（六七）だといわれているが、確実に聖典を伝えて翻訳したのは、それよりも八十四年の後、後漢桓帝の元嘉元年（一五二）であった。この当時すでにインドでは大乘仏教だいじょうが成立していたので、中国には初期の仏典と大乘の仏典が区別されることなく伝えられ、それより約千七百年以上にわたって中国語に仏典を翻訳する努力が続けられた。訳出された經典の数は千四百四十部五千五百八十六巻に及んでいる。これらの翻訳經典をひとまとめにして保存しようとする努力は、早く魏きの時代から始められた。しかしこれが印刷されるようになったのは北宋のころであった。このころから中国の高僧の著述も聖典の中に加えられるようになり、もはや三藏と呼ぶには適当でなくなつて、隋代になると「一切經」という名称が付され、唐代には「大藏經」とよぶようになった。

一方、チベットにおいても西暦七世紀ごろに仏教が伝わり、西暦九世紀から十一世紀にかけて、約百五十年の間、經典を翻訳する努力が続けられ、仏典のほとんどが翻訳された。

このほか、朝鮮、日本、スリランカ、カンボジア、トルコ、その他、東洋のあらゆることばをはじめとして、ラテン語、フランス語、英語、ドイツ語、イタリア語等の各国語に翻訳されているところから見ても、今や釈尊の恩恵は、世界のすみずみにまで及んでいるといつても過言ではない。しかし、ひるがえつてこれを内容から見ると、時代にして二千年を越える発達と変遷があり、量は万巻を越えるため、たとえ大蔵経が完全に備わつていても、これによつて釈尊の真意をつかむことは困難である。そこで大蔵経から重要なところをつかみ出して自己の信心の規範とし、よりどころとする必要がある。

仏教では釈尊のことばが最大のよりどころである。だから釈尊の教えは、我々の现实生活に対して最も深いつながりをもつた、親しみのあるものでなければならぬ。もしそうでなければ、万巻の聖典も、ついに我々の心をゆさぶることなく終つてしまふことになるからである。こういう意味で聖典は、少なくともいつも身につけている聖典は、量にして簡潔であること、質において一部に偏らず、よく全体を代表するに足るものであること、しかも正確であること、用語においてわれわれの日常語に親しいものであることが望まれるのである。

この聖典は、こういう敬虔にしてかつ慎重な配慮のもとに作られた。この聖典は、過去二千年数百年の大蔵の流れを承け継ぎ、釈尊の教えの海の中から生まれ出たものである。もとよりこれをもつて完璧と信ずるものではない。釈尊のことばは無限に深く、その徳は無尽にして容易にうかがい難い。共に同じ道を行ずる同信の叱正を請いつつ、版を重ねて、常によりよきもの、より真実なもの、より尊きものにしてゆきたいと心から願うものである。

## 仏教聖典の由来とあゆみ

この仏教聖典は、大正十四年（一九二五年）七月に、木津無庵氏を代表とする新訳仏教聖典普及会から出版された『新訳仏教聖典』をもととしてつくられたものである。

この初版本編纂にあたっては、山辺習学、赤沼智善の両教授を中心に、広く仏教学界の諸師が監修、編集の勞を寄せ、約五年の月日を経て出版された。

ここに仏教伝道協会は、木津無庵氏をはじめとする、原『新訳仏教聖典』を編纂された諸師に対して、甚深なる感謝と報恩の意を表するものである。

昭和に入つて『国民版仏教聖典』が同普及会で出版され広く全国に行き渡つた。昭和九年（一九三四年）七月に汎太平洋仏教青年大会が日本で開催されたとき、その記念事業の一つとして、前掲の『国民版仏教聖典』より、英語版仏教聖典『The Teaching of Buddha』が、D・ゴダード氏の協力を得て全日本仏教青年連盟の手によつて刊行された。

昭和三十七年（一九六二年）、仏教東漸七十周年を記念して、株式会社ミットヨ創業者沼田惠範氏が、同『英訳仏教聖典』を刊行した。昭和四十年（一九六五年）同氏が浄財を投じて財団法人仏教伝道協会を設立するや、同協会の事業として、この聖典を全世界に普及することが企画された。

この企画に従つて、昭和四十一年（一九六六年）に、新たに仏教聖典編集のための結果が行われた。メンバーは紀野一義、金岡秀友、石上善應、佐伯真光、松濤弘道、坂東性純、高瀬武三の七氏であり、増谷文雄氏、N・A・ワデル氏、清水俊輔氏などの協力も得て、ここに『日英対訳仏教聖典』が誕生した。

昭和四十七年（一九七二年）、この聖典をもとに金岡秀友、石上善應、花山勝友、田村完誓、高瀬武三のスタッフをもって編集作業が進められ、『英文仏教聖典』が刊行された。

次いで塩入亮達、高瀬武三、立川博、田村完誓、坂東性純、花山勝友（編集責任者）のスタッフによる編集が行われ、昭和四十八年（一九七三年）『和文仏教聖典』が刊行された。

更に昭和四十九年（一九七四年）、『英文仏教聖典』再編集のための編集が、R・スタイナー氏の協力のもとに、松濤弘道、坂東性純、佐伯真光、徳永道雄、田村完誓、花山勝友（編集責任者）によって行われ、先に刊行した『和文仏教聖典』と合せて『和英対照仏教聖典』が刊行された。

昭和五十三年には、鎌田茂雄、奈良康明の両氏を編集スタッフに迎え、さらに平成十三年（二〇〇一年）には、ケネス田中、米澤嘉康、渡辺章悟、前田專學（編集委員長代行）が新たにスタッフに加わった。

平成二十五年（二〇一三年）に、仏教伝道協会が財団法人より公益財団法人に移行するにあたり、前田專學（編集委員長）、石上善應、木村清孝、ケネス田中、竹村牧男、奈良康明、吉水千鶴子、米澤嘉康、渡辺章悟をメンバーとして新たに仏教聖典編集委員会が組織された。平成二十九年（二〇一七年）より竹村牧男編集委員長のもと、現代に即する聖典にするための編集が毎年行われている。

二〇一七年六月





# 生活索引

人生の意義……………	五	三	信 仰	迷いもさとりも心から現われる……………	五三	行
現実の世界……………	一〇〇	一一	信 仰	凡人にとつては成し難いが		
理想の生き方……………	二四四	九	信 仰	成せば尊い二十のこと……………	一三八	七
誤った人生観……………	四七	三	信 仰	信仰は火である……………	一八九	四
正しい人生論……………	四三	五	信 仰	信仰は三つの心をともなう……………	一九〇	七
かたよった生活……………	六〇	六	信 仰	信仰は不思議なもの……………	一九一	一〇
迷っている人へ(たとえ話)……………	一三二	三	信 仰	信仰は真実の現われ……………	一九〇	一一
人の生活(たとえ話)……………	九四	三	信 仰	真実なものが見分け難いのは		
愛欲の生活を送れば(たとえ話)……………	九三	七	信 仰	(たとえ話)……………	七八	二
老人と病人と死人が教えてくれるもの			信 仰	仏性は正しい師によつてその		
(物語)……………	九七	五	信 仰	ありかを知らされる(たとえ話)……………	八〇	一一
死は必ず訪れるもの(物語)……………	九八	七	信 仰	仏性は煩惱に包まれている		
この世にあつてだれもできない			信 仰	(たとえ話)……………	七六	八
五つのこと……………	五一	一〇	信 仰	信仰を妨げるものは疑い……………	一九二	四
世の中の四つの真理……………	五二	六	信 仰	仏は父、人はその子である……………	三六	八
			信 仰	仏の智慧は海のように広く深い……………	三五	三
			信 仰	仏の心は大慈悲である……………	一五	一
			信 仰	仏の慈悲は永遠のものである……………	一六	三

私は肉身ではない……………	一三	一	修 養	頁
私は身をもって教えを説かれた……………	二四	五	何が自分の第一の問題か	頁
私は人びとを救うために死を示さ れた……………	二四	五	(たとえ話)……………	一五八
私は方便をもって人びとの悩み を救われた(たとえ話)	二〇	四	最初の一步を慎め……………	一三八
さとりの世界……………	二四六	五	初心を忘れるな(たとえ話)……………	一六〇
仏・法・僧に帰依する……………	一八七	二	その道で成功しようと思う者は 幾多の苦難に耐えよ(物語)……………	一六七
戒・定・慧の三つを学べ……………	一七三	四	幾度たおれても奮起せよ(物語)……………	一八二
八つの正しい道……………	一七五	二	境遇によって心を動かされるな (物語)……………	一二八
さとりを得る六つの道……………	一七八	六	真理を求めている人は灯火を持って 暗室に入るようなものである……………	四二
四つの正しい勤め……………	一七七	五	人生いたるところに教えあり (物語)……………	一七一
四つの正しい見方……………	一七六	二	人は心の動くままにあやつられて 動きがちである……………	一二六
さとりを得る五つの力……………	一七七	一	教えの要は心を修めるにある……………	一一
四つの大きな心……………	一八一	一	まず心の内を修める……………	一二一
人生に覚めた人……………	四一	一	心を養えば……………	一二六
人間の死と無常……………	一二	〇		
念仏者は浄土に生まれる……………	一七	二		
自らを灯火とし、頼りとせよ……………	一〇	八		

心の有様(たとえ話)……………	一一二	二	五
心は「我」ではない……………	五〇	二	二
心に執らわれるな……………	一〇	一	一
自己の心にうち克て……………	一六二	四	四
心の主となれ……………	一一	八	八
すべての悪は身・口・意から……………	九〇	一	一
言葉と心……………	一三〇	六	六
この身は借り物にすぎない(物語)……………	一五〇	二	二
この身は汚れに満ちている……………	一三六	四	四
貪るな……………	一〇	一	一
身・口・意の三つを清く保て……………	二二八	一	一
かたよらずに励め(物語)……………	一八二	一	一
<b>悩　　み</b>			
悩みは執らわれの心から起こる……………	四五	一	一
悩みをふせぐ方法……………	一三	三	三
迷いはさとのり入口である……………	六二	七	七
迷いからのがれる道……………	一一〇	一	一
煩惱の炎を消せば清涼のさとりが 得られる……………	一四九	二	二

愛欲こそ迷いのもと……………	八八	八	八
愛欲は花に隠れた毒蛇と思え……………	八九	一	一
火のついた家に執着をのこすな (たとえ話)……………	二〇	一	一
欲望は過ちのもと……………	一一一	二	二
この世は火中にあり……………	八五	二	二
人は名利に自らを焼く……………	一一三	七	七
財色の貪りによつて人は身を滅ぼす……………	一二三	一〇	一〇
賢い者と愚かな者の特質……………	一四〇	一	一
愚者は自分の悪に気がつかない (たとえ話)……………	一四八	四	四
愚者は結果だけを見て、他人を うらやむ(たとえ話)……………	一四八	六	六
愚者にありがちなこと(たとえ話)……………	一五五	二	二
<b>日　常　生　活</b>			
施して施しの思いを忘れよ……………	一七九	四	四
無財の七施……………	一七九	八	八
富を得る方法(物語)……………	一五三	九	九
幸福を生む方法……………	一三七	二	二

恩を忘れるな(物語).....	一四五	頁
人の性格.....	九二	行
仕返しを願うものには災いが		
つきまとうものである.....	一三七	
怨みを静める方法(物語).....	二四一	五
人のそしりに動かされるな(物語).....	二二六	六
衣・食・住のために生きている		一二
のではない.....	二一四	九
衣・食は楽しみのためにあるの		
ではない.....	一一一	二
食事の心得.....	二一七	四
着物を着るときの心得.....	二一六	九
寝る時の心得.....	二一七	一〇
寒さ、暑さに対する心得.....	二一七	六
日常生活の心得.....	二二五	一一

経 済

物の使い方(物語).....	二三〇	三
財物は永遠に自分のものではない.....	二二九	九
自分のためにのみ財物をためるな.....	二三二	一一

富を得る方法(物語).....	一五三	頁
家 庭		行

家庭は心の触れあうところ.....	二二七	一
-------------------	-----	---

家庭を破る行い.....	二二一	一〇
--------------	-----	----

父母の大恩に報いる道.....	二二六	一〇
-----------------	-----	----

親子の道.....	二二二	七
-----------	-----	---

夫婦の道.....	二二三	六
-----------	-----	---

夫婦は信仰を同じくせよ(物語).....	二三一	七
----------------------	-----	---

婦 人		
-----	--	--

婦人に対する男性の心得.....	一三五	一一
------------------	-----	----

夫婦の道.....	二三一	四
-----------	-----	---

理想の婦人の誓いと願ひ.....	二三二	八
------------------	-----	---

出 家 の 道		
---------	--	--

法衣を着て、経を誦 <small>よ</small> んでいるだけ		
-----------------------------------	--	--

では僧侶 <small>そうりよ</small> ではない.....	二〇七	四
------------------------------------	-----	---

僧侶は寺とその財の相続者		
--------------	--	--

ではない.....	二〇四	一
-----------	-----	---

欲深きは真の僧侶ではない.....	二〇四	三
-------------------	-----	---

僧侶の保つべき真実の生活とは.....	二〇六	三
---------------------	-----	---

社 会

頁 行

罪人に対して……………二三三  
教師の心得……………二〇八  
九 三 行

社会の意義……………一三六

社会の現実相……………一〇〇

社会集団の型……………二三七

真の共同社会……………二三七

暗闇の野にさす光……………二三五

和合の人間関係……………二三七

社会集団における和合の法……………二三九

教団の理想……………二三八

仏教徒の社会的理想……………二四五

秩序を乱すものは共に滅ぶ

(たとえ話)……………一四六 一二

ねたみ、争う者は共に滅ぶ

(たとえ話)……………一四六 一二

老人を尊敬せよ(物語)……………一四〇 九

師弟の道……………二二二 一二

友人の道……………二二三 一〇

友を選ぶ法……………二二五 六

雇傭者と労働者の心得……………二二四 四



# 用語解説

(五十音順)

この解説に含まれている言葉には、本文では、各節の最初に出てくるものに\*印が付してある。

因縁 (いんねん) (heu-pratyaya)

因と縁とのことである。因とは結果を生じさせる直接的原因、縁とはそれを助ける外的条件である。あらゆるものは因縁によって生滅するので、このことを因縁所生などという。この道理をすなおに受け入れることが、仏教に入る大切な条件とされている。世間では転用して、悪い意味に用いられることもあるが、本来の意味を逸脱したものであるから、注意を要する。なお縁起という場合も、同様である。

廻向 (えこう) (parinama)

自分のなしたよい行為をふり向けることで、これに、自分自身の未来のさとりにふり向ける場合と、他の人びとにふり向ける場合とがある。現在一般に世間で使われているものは、「死んだ人が、この世でなした悪行の罪を消して、来世での良い結果を得るように」という願いをもつて、葬式や法事の際の読経の功德によって死者の冥福を祈念する、という形の廻向である。

縁起 (えんぎ) (pratyasamupāda)

因縁○生起○の略である。あらゆる存在が互いに関係しあつて生起することである。

仏教の教えの基本となる思想である。あらゆる存在のもちつもたれつの関係を認めるから、「お蔭さまで」という感謝となり、報恩という奉仕も生まれてくる。この縁起思想は、さらに哲学的な展開を遂げ、煩瑣な組織をもつに至る。転じて寺院や仏像の由来や伝説を指したり、吉凶をかつぐのに用いられるようになったりするが、本来の意味を忘れてはならない。

教団 (きょうだん) (saṅgha)

同じ教えを奉じて集まった人びとの集団をいう。一般に、教義を説き教える聖職者層と、教えを受け入れる信者から構成される。仏教では古来、これをサンガと称した。しかし厳密には初期においては出家者教団を指したと思われる。後に大乘が興起すると、菩薩という人間像を目指して実践する人びとの集まりは、在家、出家の区別を超えて連帯した教団となったとい



われる。組織としての教団は、現在では一宗一派についていわれている。

### 空くう (sunyata)

存在するものには、実体・我がないと考える思想である。すべてのものは相縁より、相起こって存在するにすぎないから、実体として不変な自我がその中に存在する筈はずがない。

したがって実体ありととらわれてはならないし、存在しないととらわれてもならないわけである。すべてのものは、人もその他の存在も相対的な関係にあり、一つの存在や主義にとらわれたり、絶対視したりしてはならない。般若経系統の思想の根本とされる。

### 解脱げだつ (vimukti・vimoksa)

文字どおりに、この輪廻りんね転生てんじやうする迷いの世界という縛ばくから解かき離りれて、涅槃ねはんとよばれるさとの境地へと脱出することである。そして、この迷いの世界から脱出して、永遠にさとの状態にとどまるものが、仏陀ぶつだであり、そこでは一切の縛ばく、すなわち煩惱ぼんノウから離れているので、

自由自在なのである。

### 業ごう (karma)

本来の意味は行為ということであるが、因果関係と結合して、行為のもたらす結果としての潜在的な力とみなされている。つまりわれわれの行為は必ず善悪・苦楽の果報をもたらすから、その影響力が業と考えられるに至っている。善い行為を繰り返し、積み重ねれば、その影響力が未来に及んで作用すると考えられている。なお業には、身・口・意の三種の行為があるとされる。

### 慈悲じひ (maiti-karuna)

仏教におけるもつとも基本的な倫理項目で、〃慈じとは相手に楽しみを与えること、〃悲ひとは相手から苦しみを抜き去ることである。これを体得して、対象を差別せずに慈悲をかけるものが、〃覚者かくしやすなわち仏ほとけであり、それを象徴的に表現したものが、観音・地藏の両菩薩である。やさしくいうと、慈悲とは、相手と共に喜び、共に悲しんであげる〃ということになる。

## 出家 (pravrajāna)

家庭生活を捨離して、専ら道の修行を行うこと。またその実践者をいう。インドでは修道のために家庭を出て、宗教的実践の生活に入ることが、ごく普通のこととされていて、釈尊もそれに従って出家し、沙門（バラモン以外の修行者）となり、遂に悟りを開いて仏陀となり、仏教の開祖となった。在家信者に対して、出家修行者をはつきり区別する仏教教団の伝統は、日本では厳格とはいえない。

## 智慧 (prajñā)

普通に使われている「知恵」とは区別して、わざわざ仏教では「般若」の漢訳としてこの言葉を用いているが、正邪を区別する正しい判断力のこと、これを完全に備えたものが「仏陀」である。単なる知識ではなく、あらゆる現象の背後に存在する真実の姿を見ぬくことのできるもので、これを得てさとり境地に達するための実践を「般若波羅蜜」という。

## 中道 (madhyamā-prāipad)

偏見を離れた中正の道をいう。仏教の立場を指している。したがって仏教のそれぞれの流れでは、中道の思想は尊重され、高揚されてきた。中間の道という意味ではなく、とらわれを離れ、公平に現実を徹見する立場を形容しているわけだが、その内容は両極端を否定し、止揚する思想として表われてくる。例えば有・無の両極端、断・常の二見を否定する立場となる。一種の弁証法哲学といえないこともない。

## 涅槃 (nirvāna)

梵語の「吹き消す」という意味の、ニルヴァーナという単語の漢音写で、「滅」・「滅度」・「寂滅」などと訳される。丁度ローソクの火を吹き消すように、欲望の火を吹き消したものが到達する境地で、これに到達することを「入涅槃」といい、達したものを「仏陀」とよぶ。釈迦牟尼仏が亡くなった瞬間を「入涅槃」ということもあるが、肉体が減じたときに完全に煩惱

の火が消える、という考え方からで、普通は、三十五歳で仏ぼつになつたときに、涅槃ねはんの状態で達したと考えられている。

### 波羅蜜はらみつ (paranīa)

パーラミターという梵語の漢音写で、度ととか、到彼岸とうひがんと訳される。此の迷いの岸である現実の世界から彼のさとの岸である仏の世界へと渡してくれる実践行のことで、普通六波羅蜜ろくぱみつといつて、六種類があげられる。六とは、布施・持戒・忍辱・精進・禪・定・智・慧のことで、日本では、春秋の彼岸ひがんとよばれる行事は、これらを実践するということから名づけられたのである。

### 仏ぼつ (ぼつだ Buddha)

梵語の $\text{buddha}$ といふ意味の単語を漢字に音写したものが「仏陀」で、その省略が「仏」であり、「ほとけ」とも読ませる。普通「覚者かくしや・正覚者しょうかくしや」と漢訳され、もともとは、仏教の創始者である「釈迦牟尼仏しやくか牟尼ぼつ (ゴータマ・シッター

ルタ)を指した。仏教の目的は、各人がこの「仏」の状態に到達することで、その手段や期間等の違いによって宗派が分かれている。

大乘仏教の場合、歴史上の仏である釈迦牟尼の背後に、種々な永遠の仏の存在が説かれるようになる。例えば、阿彌陀仏・大日如来・毘盧舍那仏・薬師如来・久遠実成の釈迦牟尼仏といった仏が、各宗派の崇拜の対象とか教主として説かれている。

なお日本では、死者のことを「ほとけ」とよぶが、これは浄土教の「往生成仏おうじやうじやうぼつ」思想の影響で、死者が浄土に生まれ、そこで「仏」になるという信仰に由来する。

### 仏性ぼつじやう (buddhata・buddharva)

「仏になる種子」といったもので、あらゆる存在にこれを認めるところに仏教の特徴がある。「覚りに達する潜在力・可能性」といつてもよい。又、「仏心」といつてもよいが、「一切衆生悉有仏性」という句にも表われているように、すべ

ての存在に、差別しないでこの仏性を認めたと  
ころに、仏教の平等説の立場が見られる。この内  
在する仏性を外に現わしたものを「仏」とよぶ。  
法ほふ（達磨・dharma）

さてれるものである。仏陀ぶつだによって説かれ  
た、眞実の教え」ということで、その具体的な  
内容は、三藏とよばれる、經（仏の説かれた教  
え）・律（仏の定めた日常規則）・論（經と律と  
に対する解釈や注釈）の三種の聖典である。こ  
れは、覺者である、佛かくむし陀だ・佛教徒の集まりで  
ある、僧伽そうぎあと共に、仏教の基本的なよりどこ  
ろである三寶さんぼうをなしている。

### 菩薩ぼさつ (bodhisatva)

元來、積尊じくそんの成道じやうどう以前の修行時代を指す。悟  
りを求める人という意味である。大乘仏教が興  
起してからは、拡大解釈されて、大乘佛教徒を  
指すことになる。向上的には仏の悟りを目指し  
つつ、向下的にはすべての人びとを同様に仏の  
悟りへと導こうと努力する人間像を菩薩とよぶ

ようになる。さらに仏の慈悲じひや智慧ちえの働きの一  
部分をにない、仏の補佐役として人びとの悩み  
に応じて現われる、觀音とか地藏のような威神  
力のある救い手もそうよばれる。

### 煩惱ぼんごう (klesa)

悟りの実現を妨げる人間の精神作用のすべて  
を指している。人間の生存に直結する多くの欲  
望は身体や心を悩まし、かき乱し、煩わづらわせる。  
その根元は我欲・我執であり、生命力そのもの  
に根ざしているともいえる。貪むねまり、瞋いかり、愚か  
さがその根本であり、派生して多くの煩惱が数  
えられる。これらは悟りの実現に障害となるか  
ら、修道の過程で滅ばさなければならぬとい  
える。しかし生命力に直結しているものを否定で  
きないとして、悟りへの跳躍台として肯定する  
思想もある。

### 無我むが (anatman)

仏教の最も基本的な教義の一つで「この世界  
のすべての存在や現象には、とらえられるべき

「実体はない」ということである。それまでのインドの宗教が、個々の存在の実体としての、我々を説いてきたのに対し、諸行無常を主張した仏教が、永遠の存在ではあり得ないこの世の存在や現象に実体があるわけではない」と説いたのは当然である。なお、我々は他宗教という靈魂にあたるといえる。

### 無常 (anitya)

あらゆる存在が生滅変化してうつり変わり、同じ状態には止まっていけないことをいう。仏教の他宗教と異なる思想的立場を明示する一つである。あらゆるものは、生まれ、持続し、変化し、やがて滅びるといふ四つの段階を示すから、それを観察して「苦」であると宗教的反省の契機とすることが大切である。これもいろいろな学派の立場から、形而上学的な分析がなされてきたが、単なるペシミズム、ニヒリズムの暗い面のみを強調してはならない。生成発展も無常の一面だからである。

### 無明 (avidya)

正しい智慧のない状態をいう。迷いの根本である無知を指す。その心理作用が愚痴であるという。学派によつて分析、解釈はさまざまであるが、いずれも根源的な、煩惱を煩惱たらしめる原動力のようなものと捉えられている。したがって、例えばあらゆる存在の因果を十二段階に説明する十二因縁説では、最初に無明があると設定しているくらいである。生存の欲望の盲目的な意志と捉えてもよいであろう。

### 唯識 (vijñaptirāta)

この世のあらゆる存在と現象とは、人間の心ころから生まれたもので、実際にあるのは、この心ころだけなのだ、という説で、大乘仏教の中に現われたもの。即ち、眼耳鼻舌身意という六つの感覚器官がそれぞれの対象を認識する六つの識のほかに、第七、第八(阿頼耶識)の二識をたて、これら八つの識の働きが、この世に存在や現象を生じさせているのである。

輪廻りんね  
(samsāra)

過去世から現在世へ、更に未来世へと、生まれ変わり死に変わることを、輪がまわるのにとえたもので、輪廻転生りんねてんしょうという言葉もある。人間が、この迷いの世界からさどりの世界へと脱出しない限り、地獄じごく・餓鬼がき・畜生ちくじょうの三悪道や、それに阿修羅あしゅら・人間・天上を加えた六道の世界への転生を永遠に繰り返すのである。この輪廻の輪から抜け出したものが、仏陀ぶつだとよばれる。



## 仏教伝道協会について

仏教伝道協会のことを語るには、先ず一人の実業家沼田惠範氏（株式会社ミットヨ創業者）のことを語らなければならない。

彼は、去る昭和九年に現在の事業を始めたとき以来、事業の繁栄は天・地・人により、また人間の完成は智慧と慈悲と勇氣の三つが整つてのみできるものであるとして、技術の開発と心の開発をめぐして会社を設立した。世界の平和は人間の完成によつてのみ得られる。人間の完成をめぐす宗教に仏教がある。

彼は半世紀をこえる会社経営のかたわら、仏教伝道のために仏教音楽の普及と近代化を志し、仏教聖画や仏教聖典の普及に努めてきたが、昭和四十年十二月にこれら一切の仏教伝道事業を組織化し、これを世界平和の一助とするために私財を寄進した。

かくて仏教伝道協会は、仏教伝道の公の機関として発足した。仏陀の教えを遍く一切に及ぼし



て、すべての同胞と共にこの大智<sup>だいち</sup>と大悲<sup>だいひ</sup>の光に浴するにはどうしたらよいか。

仏教伝道協会は創設者の意志を引き継ぎ、この問題を永遠に問い続けてゆこうとするものである。約言すれば、仏教普及のためのあらゆる努力が仏教伝道協会の事業のすべてである。

この聖典は日本の長い歴史をふり返ったとき、我々が仏教文化をその誇りとしながら、真に日本人の経典といえるものを持たなかつたことを反省して生まれたものである。

したがってこの聖典は、だれでも読める、読んで心の糧<sup>か</sup>となる、どんな人でも、その机上に置いて、また外出時に携え、生きた釈尊<sup>しやくそん</sup>の大人格に触れることができるように作られている。

仏教伝道協会は、この聖典が一つでも多くの家庭に入り、一人でも多くの同胞の手に渡り、すべての人がひとしく教えの光に浴することのできる日のくることを願ってやまない。

合 掌